

「ついに改名『感謝の対話!?!』」(批評対話IN九州の報告)

西上寛樹

今回の「批評対話IN九州」の特徴は、参加者のおよそ八割方が鹿児島子ども劇場の方たちだったということ。鹿児島子ども劇場の藤さん、柿木(かきのき)さん、柿木(かきぎ)さんは、批評対話が日本に紹介された当初から大阪、東京に毎回足を運び、その手法の輸入に努めてきました。作品について前向きに語り合う言葉を手に入れるためです。そして「作品合評会」という集まりを独自に立ち上げ、試行錯誤を繰り返していたそうです。この度は、そんな鹿児島子ども劇場の念願かなって、ついに本場デンマークから鹿児島へ批評対話の直輸入が実現しました。語り合うための言葉を探し求めていた団体が、本家本元の批評対話のレッスンを受けたのです。それは驚くほどの即効性を持つて形に表れました。対話が行われた翌日から作品が変わったのです。それは一体どんなレッスンだったのか、批評対話の最前線を報告します。

まず概要を示し、それから進行に沿って紹介していきます。その後今回新たに紹介された「四つの質問ガイド」という手法に考察を加え、最後に「批評対話」という名前が本国デンマークですでに別のものになっていることを紹介します。

○概要

日時：二〇一五年二月二十六日から三月一日までの計四日間

初日はレクチャーのみ(二時間)

二日目から一日一作品というペースで計三作品(各三時間)

場所：鹿児島県民交流センター

講師：ヘンリック・コーラー(デンマーク)

ピーター・マンシャー(デンマーク)

松本則子(人形劇団クラルテ)

対象作品：「のらペンギンのペンじろう」劇団道化

「おきやくおことわり」人形劇団クラルテ

「いまからいえでにいつてきます」劇団風の子九州

参加者：各回四十〜五十名(うち八割は鹿児島子ども劇場、他、児演協批評

対話プロジェクトチーム、関東、東海よりアーティスト数名)

※今回も同時通訳によって進められました

## ○進行

次に内容を紹介します。一日目は批評対話のレクチャーが行われました。ここでは批評対話がデンマークで生まれた経緯などが語られましたが、それらのごとは、「げき」バックナンバーに掲載されていますのでここでは省きます。なお、今回の報告は批評対話の方法を紹介するのに主眼をおいたため、作品の内容にはほとんど触れていません。

参加者はコの字型で座席を組み、講師陣と劇団側は前方にハの字になって着席しています。

### ①目をつむる（二分）

二分間、目をつむって昨日の演劇体験をそれぞれ思い出します。この時にヘンリック氏は「さあ、みなさん。昨日家を出たときのことから思い出してください。」と呼びかけました。ピーター氏が付け加えます。「演劇を観るのはレストランに行くのと同じことです。レストランに行くことは着ていく洋服を選ぶところからスタートしますね。そして店までの道のりがある。建物の雰囲気を感じながら扉を開けると迎えてくれるウェイターがいる。席について料理を待ちながら会話を楽しみそして料理を食べる。この総合的な体験こそがレストランへ行くということなのです。演劇も同じことです。」

### ②ペアで語る（五分）

次にペアを作り、昨日の演劇体験について五分間語り合います。ここから参加者は机を離れてじかに床に座ったりして語り合いました。リラックスした雰囲気が出されます。

二人で語るということは①で行った作業を言葉にして他者に届けることです。私は作品のある部分について語りましたが、相手の方は劇場さんの挨拶をあげました（感極まって涙した劇場さんがいたのです）。同じ芝居を観たはずなのに、まったく違う体験談として語られることに驚きます。

### ③四人グループで語る（十分）

ここでは四つの質問を通してグループが演劇体験を語り合います。（この四つの質問は後で紹介する「四つの質問ガイド」とは別物）

◇何を見たか？

- ◇何を聞いたか？
- ◇どう感じたか？
- ◇何を考えたか？

これらの質問にまず一言で答えたメモを用意します。そしてグループ内のインタビュー形式で一人ずつ何を書いたか答えていきます。一言で書いた言葉を補足説明することが求められます。

※四つの質問は関係性を持つものなのか、それぞれ独立した質問であるのか、講師に確認することは出来ませんでした。しかし、独立した質問と捉えた方が演劇体験をよりダイナミックに振り返ることが出来ると思います。

#### ④ノート作業（五分）

次はまた一人に戻ります。そしてノートに大きな円を描き、その真ん中に昨日の演劇体験で一番強く持った印象を書き込みます。そしてその周りにその印象を生んだと思われる様々な要素を書き込んでいきます。このメモは誰かに見せたりするわけではありません。

①から④の作業はいわば批評対話のウォーミングアップでしょう。①と④は演劇体験が自分の心に及ぼし影響を振り返ってみるといいう作業。②と③はそれ言葉を相手に伝える練習。言葉にする練習+他者との違いを認識すること。「対話とは違う考えを持つもの同士が言葉を使ってコミュニケーションするもの」という「批評対話」の大前提を確認したのだと思います。その観点からいえば①、④、②、③の順序の方が効果的だったのではないかと思いました。さて、いよいよ「批評対話」に入ります。

#### ⑤講師によるアーティストへの質問（二十分）

クオリティーペーパーの七つの基準に沿って質問が行われます。七つの基準についても詳しい説明は「げき」バックナンバーにありますので省略します。この講師の質問コーナーは今回の批評対話の本題ではありません。本題はあくまで参加者とアーティスト同士で行われるものです。これはそのためのお手本として示されたものです。質問は劇団の歴史や原作の有無など表層的なところで留められていました。

ここで休憩。（十分）

#### ⑥グループディスカッション（四十五分）

ランダムに少人数のグループが作られました。グループ数は批評対話に参加

しているアーティスト側の人数によって決定します。アーティストが五人参加している会はグループを五つに分ける、という形です。そして各グループにアーティストが一人ずつ入りました。松本さんはグループに入りましたがデンマークの二人は参加していません。質問する際に二つの注意点と四つの質問ガイドが用意されました。二つの注意点とは…

◇相手に感謝の念を持つこと

◇純粋な質問であること

純粋な質問とは、質問者が答えを知らない質問のことです。ピーター氏が「子どもが先生にする質問が純粋な質問です。子どもは分からないことを聞きますね。反対に先生が子どもにする質問は純粋な質問ではありません。先生は答えを知っていてあえて子どもに尋ねているわけですから」と説明します。四つの質問ガイドについては以下のようなメモが配布されました。

- 一、刑事風 Detective (どんな形をしているか) … アイディア、方法、物語の選択に関する質問
- 二、人類学者風 Anthropologist (掘り下げる) … 演技、表現方法、内容、演出、美術などへの具体的な質問
- 三、未来学者風 Futurist (将来の可能性) … 改善点、可能性、発展性、向上性に関する質問
- 四、キャプテン風 Captain (具体的な計画) … 「このレッスンで何を学んだか?」「実際に明日から何を実行していくのか」などアーティストのこれからの対応に対する質問

さあ、いよいよグループディスカッションの始まりです。参加者の机の上には「クオリティペーパー」と「四つの質問ガイド」の二枚のメモが並び、胸のうちには「二つの注意点」を秘めています。進行役はとくに設けません。ただ松本さんと東京から参加した批評対話プロジェクトチームが一人ずつ各グループに入りました。

話し合いが淀んでいるグループはなさそうです。鹿児島子ども劇場には話し慣れた方が多く、これまで行われてきたという「作品合評会」の地力を感じます。少数のグループで話し合いがもたれたことも和やかなムードを演出し、話し合いは時間を経て盛り上がり上がっていききました。アーティストの方々も飛び交う質問攻めに硬化することなく、明るく前向きに話されています。四十五分はあっという間に過ぎました。

⑦グループ発表(二十五分)

各グループでどんなことを話し合ったか代表者が報告し合います。

⑧感想(五分)

参加者全員が今日の批評対話の感想を「一言」で述べて終了です。

○考察「クオリティペーパー」

以上が今回の批評対話のあらましですが、⑥の「グループディスカッション」が説明不足ですので補足します。『テーブルの上に「クオリティペーパー」と「四つの質問ガイド」を並べ胸のうちに「二つの注意点」を秘めて……』と書きましたが、これ、想像出来ましたか？身近な作品を思い出してみてください。「クオリティペーパー」と先ほどの「四つの質問ガイド」を見ながら質問していくことが出来そうですか？難しいと思います。私は今回で批評対話参加は二回目でしたが実際に「クオリティペーパー」に目を通したのは今回が初めてでしたし、「四つの質問ガイド」を見るのも初めてです。批評対話は「批判はなし。全部質問の形ですらしい……」という程度の前知識しか持ち合わせていませんでした。そのような素人がいくら机の上に「クオリティペーパー」などの用紙を並べても容易に質問できるわけではありません。松本さんはじめ、児童協批評対話プロジェクトチームのみなさんは、批評対話熟練者ですので話をどう進めていけばいいかが分かっていますしやるのですが、私はなかなかそうできない。これには「クオリティペーパー」自体にも問題があります。まず「クオリティペーパー」の七つの基準の第一項から見てください。

◇その劇団は熱意をもって取り組んでいるか？

この質問に「NO」と答える人がいると思いますか？いいませんね。つまりこれは質問としては機能しない項目なのです。第二項も似ています。

◇目的は意義深いものであるか？(劇団はお金儲け以上の理由で新たな劇を作りたいと思っているか？)

これも「NO」と答える人はいないでしょう。第一良識ある人間なら「あなたのやっていることは意義深いことですか？」と聞くことすら出来ないと思います。次は第三項と第四項をまとめて見てみましょう。

◇その作品の目的、ねらいは何か？

◇劇団の目標、ねらいは何か？

やつと質問らしい質問が出てきました。強いて言えば順番は逆の方がいいような気がします、とにかくこの項目なら質問できます。

たぶん第一項と二項は質問ではなかったのですね。質問ではなくて視点。もしくはアーティストへ向けた質問ではなくアーティストのいないところで観劇者同士が話し合うための議題。このように「クオリティペーパー」は視点、質問、議題が混ぜこぜになって作られています。質問の中にはこんなすごいものもあります。

◇その劇はその作品の持つドラマツルギーのルールを守っているか？

これは「戯曲」とい基準の中の項目ですが、こんな質問されたら大変です。この質問で話し合うためには「ドラマツルギーとは何か」というところからスタートしなければなりません。みなさん、「ドラマツルギー」を定義できますか？なんとなく分かる位じゃダメですよ。人と話し合うための共通認識として理解していなくてはいけないのですから大勢の前で言葉にして語れるくらいじゃないといけません。とても難しいことですね。「クオリティペーパー」はこのような三十六にもわたる項目によって成る指針なのです。これを「ハイ」と渡されて質問する難しさが分かっていただけでしょうか。逆の言い方をすると「批評対話ってクオリティペーパーで質問が全部決まってるんでしょ？」と思われる方には「全然そんなことありません。」ということも分かっていただけたと思います。ではどうやって質問を作っていたか、話し合いを組み立てていたか：それはひとえに進行役の「実力」です。今回はグループディスカッションにおいて進行役を設けなかったと書きましたが、実際には松本さんはじめ児童協の批評対話プロジェクトチームが進行役を務める形となりました。その人たちの「対話力」によって話し合いが組み立てられていたようです。私自身、自分のグループの話し合いに没頭していますから他のグループが具体的にどのような手順で話し合いを進めていったか詳細は分かりませんが、良い話し合いが進んでいるところは雰囲気で分かります。多くの方が発言しているからです。それも様々な箇所についてバラバラと質問しているのではなく、一つの問題について様々な角度から意見を述べているんです。つまり質問を積み上げている。そういうところは雰囲気が出るんですね。物語に起承転結があるように話し合いにも起承転結が生まれているんです。それは「クオリティペーパー」をな

ぞるだけじゃ駄目なんですね。また「二つの注意点」に気を使いすぎて、アーティストにひたすら「感謝」していても駄目です。また、「純粹な質問」だけでも駄目です。「感謝」も「純粹な質問」もきつと出しどころがあるんですね。それを見極めて様々な質問を引き出しつつ全体の話し合いにうねりをつくるためには、進行役の力がある。実は私も児童協のプロジェクトチームの内の一人でした。しかし、上手く話し合いを展開させられなかった。この文章にはその反省の意味もあります。デンマークの講師は日本語を分からなくても話し合いが淀んでいるのは分かったようです。二日目からあるメモが渡されました。それが先に紹介した「四つの質問ガイド」だったのです。しかしこのメモだけでは意味がよく分かりません。講師も時間の制限があつてか、このメモについて詳しく説明してくれることはありませんでした。ですから、この場を借りて「四つの質問ガイド」をどのように使えば良いのか、考察してみたいと思います。途中私見も多々述べます。それは本家デンマークの手法から逸脱してしまうことになるかも知れません。しかし、批評対話を学ぶことの目的は「批評対話を正確に輸入することではなく、「日本人が作品について語り合う土壌をつくる」ということです。私の解釈もその目的についての一つの考察として考えていただければお許しいただけることでしょう。

#### ○考察「四つの質問ガイド」

もう一度先述のメモをご覧下さい。ユニークなネーミングが目につきますね。刑事風、人類学者風、未来学者風、キャブテン風……このネーミングがよく分かります。人類学と演出・美術がどう結びつくのかが分かります。また未来学者と聞いてもイメージがわきません。試しに広辞苑（第六版）を引いてみると、「未来学……科学的方法によって未来社会予測のための定量的情報を得ようとする研究。一九六〇年代に提唱されたが、方法、理論が明確にならないまま衰退」と出ています。イメージが湧かないはずですが、刑事風、キャブテン風というのはいぶん幼稚なネーミングです。デンマークでは、批評対話はずでに子どもの間でも行われているようですから、もしかしたらこのネーミングは子どもに親しみを持ってもらうためにつけられた名前なのかも知れません。しかし日本においては、大人である私たちが批評対話に悪戦苦闘しているのですから、キャッチーなネーミングより本質を捉えるのが先決です。従ってまずはこのネーミングは脇に置いてしましましょう。（ ）でくくられた言葉をタイトルに置き換えてもう一度見てみます。

一、どんな形をしているか……アイディア、方法、物語の選択についての質問

- 二、掘り下げる：演技、表現方法、内容、演出、美術などへの具体的な質問
- 三、将来の可能性：改善点、可能性、発展性、向上性に関する質問
- 四、具体的な計画：「このレッスンで何を学んだか」「実際に明日から何を實行していくのか」などアーティストのこれからの対応に対する質問

少し分かりやすくなりました。要は話し合いに「段階を設ける」ことが目的だったようです。具体的な質問の形に置き換えてみると「一」では

「どんな経緯でこの作品が生まれたか？」

「原作を選んだ際の決めては何か？」

「なぜ人形を用いて表現しようと思ったか？」

というような質問が並ぶことになるでしょうか。要するに「アーティスト側の思惑」を尋ねる時間なのです。クオリティペーパーの第三、第四項目「作品の目的、ねらいは何か？」「劇団の目標、ねらいは何か？」という質問をしてもいいと思います。しかしアーティストの答えに対して質問を上乗せする必要はまだないでしょう。ここは観客が「聞く」コーナーなのです。「感謝の念」を持って聞く側に徹した方がいい。より大きな議論を展開させるための下ごしらえだと思っただけなら聞く側に徹してください。

次に「二、掘り下げる」ではどんな質問が並ぶかをみてみましょう。

「あの場面で登場人物の○○はなぜ△△したのか？」

「なぜあそこだけ映像を使ったのですか？」

「背景とセットの関係性が今ひとつ分からなかったがあれはどういう関係か？」

「あそこの台詞が聞き取れなかったが何と言っていたのか？」

などでしょうか。ここは「純粋な質問」のコーナーです。分からなかったこと、聞きたかったこと、なんでもどんどん聞きましよう。ここでは「感謝の念」をそれほど意識しなくてもいいはず。それより「純粋な質問」を心がけます。子供になった気分で分からなかったことをどんどん聞く。ここではアーティスト側に柔軟な態度が求められます。作品を守ることを考えず、まっすぐどんどん答えてあげましょう。ここでも質問を積み上げていく必要はありませんし、観客側もアーティストの答えを聞いて「それならこうやったら：」などと提案する必要ありません。要するにこのコーナーは質問という形をとって、「作品に対する観客の印象」を浮かび上がらせているんですね。



※二を「観客の印象」のコーナーにとらえると「分からなかった」ことを列挙しただけでは「観客の印象」を正確に再現したとは言えません。「分からなかった」と同じように「分かった」ことも列挙すべきです。そのためには質問という形に縛られることなく感想を用いても良いと思います。「あの場面で泣いてしまった」とか「あそこで笑った」とかそれくらい簡単なものでかまわないと思います。それをどんどん並べる。むしろこの作業を先に行って、次に「分からなかった」ことを質問の形で列挙した方が順番として自然だと思います。この時に分かった人と分からなかった人で議論したくなると思いますが、ここではその気持ちを抑えます。

さあ、みなさん、もうお気づきでしょうか。これで「アーティストの思惑」と「観客の印象」が並んだのです。そこにはおのずと「差異」が生じます。観劇後の漠然とした印象が、鮮明な形をもってテーブルの上に姿を現したのです。それはなんのためか。「差異が少ないのが良い作品」と判定するためではありませんよ。「差異」を共有したのは、あくまで議論を深めていくためです。「アーティストの思惑」と「観客の印象」を並べてきたことで、今やグループの中に色んな発想や質問が浮かんでくることだと思えます。情報をしかるべき順序で丁寧に並べていくと瑞々しい発想が生まれます。人間の脳みそはそのようなスペシャルな機能を持っているんですね。パソコンなどの人工知能にはない、人間特有の「脳の飛躍」です。これを待っていました。最初から「これからどうすればいいか」と話し合わずにわざわざ遠回りしてきたのはこのためだったのです。さあ下ごしらは終わりました。いよいよコーナーは、批評対話のクライマックス「三、将来の可能性」にうつります。

ここからは、はばかりことなく思いついたことをどんどん言葉に出していきましょう。「感謝」や「純粋な質問」を変に意識する必要すらないと思えます。それは時に自分の瑞々しい発想にブレーキをかけてしまう恐れを持つからです。問題は共有されています。みんな同じものを見ています。議論は常に前向きに向かうはずで、心配は要りません。誰かの質問に、別の誰かが触発されることもあるでしょう。この触発を楽しむ。思いつくままにどんどん質問を上乗せしていきましょう。アーティストも「作品の責任者」という立場を少しの間忘れて話し合いそのものを楽しみましょう。議論は「改善点、可能性、発展性」という作品への具体的なアプローチを超えて「子どもの可能性」や「そもそも我々はなぜ演劇を観るのか」といった大きな問いに発展するかも知れません。そしたらしめたものです。自由闊達にこの大きな議論を楽しんで下さい。

こうして質問ガイドは最終章「四、具体的な計画」に移りますが、私はこの最終章は必要ないのではないかと考えています。三までが有意義な時間になれば

アーティストはきつと家で色々考えます。今、言葉にして求めるより考えが熟成して形になるまでじつと待ってあげたほうがいいと思うのです。話し合いに求められた以上の脳の飛躍が作品づくりでは求められるからです。

以上が私の考える「四つ(二つ?)の質問ガイド」の使い方です。「私が考える」というよりは、よい話し合いが来ていたグループはこのような手順を踏んでいたのではないかと推測を立てた形です。少し弁解がましくなりますが、私たちのグループの話し合いも興味深い問題定義や実用的なアイデアが生まれなかったわけではありません。ただそれは個人プレーによるものが多く、「このグループで話し合わない」と到達できなかった境地」といえるものではありませんでした。せっかくみんなで集まったのですから議論を大きく展開させたいものです。しかし時間は有限です。限られた時間の中でその境地に達するためには話し合いに化学反応を起こさなければなりません。「四つの質問ガイド」はきつとその化学式です。どのように解釈すれば最も効果を発揮するか、みなさんも是非考察してみてください。

〇ついに改名「感謝の対話!?!」

最後になりましたが本国デンマークの批評対話は「Critical Dialogue」という名前ではなくなつたそうです。「Critical」という単語には「批評される」というネガティブなイメージがついて回るので現在は感謝の意を込めて「Appreciative Dialogue」と呼んでいるとのことでした。本国デンマークにおいての名前の変更は日本の「批評対話改名論議」に影響を及ぼすことになるでしょうか。しかし、ここで一番大切なことは「なぜ感謝するのか?」という本質に言及することです。みなさんは何故だと思いますか?何故批評対話においてアーティストをリスペクトしているのですか?

「アーティストを硬化させないため」

それもしかにあるでしょう。しかしそれはあくまで実利的な一面に過ぎません。それでは本当の感謝とは呼べないでしょう。断っておきますが私は精神論を説いているわけではありません。新しい技術や概念が輸入された時にはまずその本質を考えてみたいというだけです。遠回りに見えるその作業が、実は批評対話を日本に根付かせるための一番の近道なのではないかと思うからです。

「なぜ感謝するのか?」

これは頭だけで考えても仕方がない問題ですね。ですから矛盾するようですがひとまずこの問いを脇においてまっさらな気持ちでまた批評対話に参加してみようと思つています。その答えは良い対話が行われた時おのずと浮かび上がってくるような、そんな気がしています。